

La Pierre qui Tremble
1934
by Pierre Boileau

目次

震える石

5

訳者あとがき

187

主要登場人物

アンドレ・ブリュネル……………パリの探偵

ドウニーズ・セルヴィエール……………二十歳のパリジエンヌ

ジャック・ド・ケルヴァレク……………ドウニーズの婚約者。二十歳

シャルル・ド・ケルヴァレク……………ジャックの父。〈震える石〉の当主

ニコル医師……………ケルヴァレク家の友人

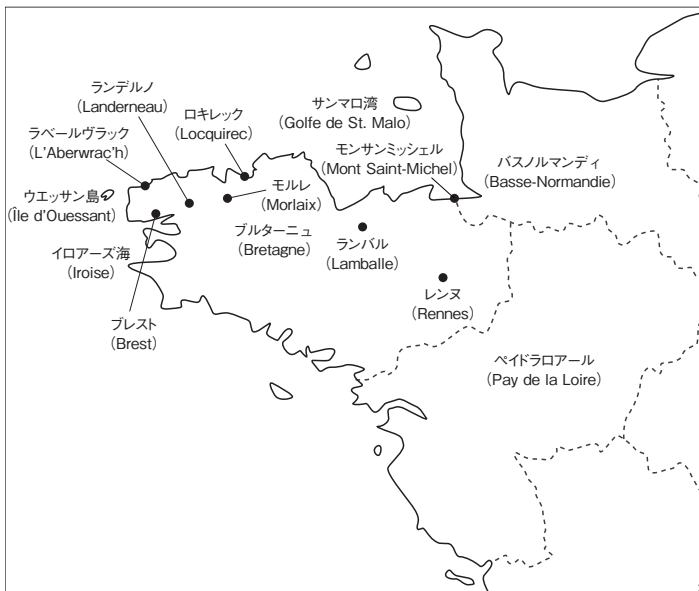
イヴォン……………ケルヴァレク家の使用人

アネット……………ケルヴァレク家の女中でイヴォンの婚約者

ゴンタール……………ブレストの予審判事

マリー・カルヴェス……………ロキレック在住の老女

震える石



第一章 パリーブレスト急行にて

「レンヌ！ 十分間の停車です。駅には食堂がございます」

車内放送で飛び起きたアンドレ・ブリユネルは、何秒か経ってから、ようやく自分がどこにいるか思い出した。夜気は冷たく、震えをこらえて立ち上がると、あくびをしながら窓へ近づいた。窓ガラスの隅を青いカーテンで拭い、駅の時計で時間を確かめる。

再び座席に身を横たえる。

「あと五時間でブレストに到着、十時間後にはウエッサン島か」

島の名を口にするだけで嬉しいらしく、声に出して何度も繰り返す。

「ウエッサン！」

ウエッサン。まだ若いがすでに名高い探偵アンドレ・ブリユネルにとって、その名は安らぎを意味する。

毎年同じ時期、六月末に、どんなに大事な仕事があるかと、誰にも居場所を知らせずに姿をくらし、「自分の」島へこもるのだ。

ごく親しい友人にさえ、滞在先を教えない。

一年のうち十一カ月間仕事に打ち込むからこそ、俗世間から遠く離れて過ごすヴァカンスの間だけは、パリを思い出させるものはいっさい目にしたくない。

手紙は受け取らず、どんな新聞も読まず、島で行き会うわずかな観光客をも疫病のように避ける。

話し相手は子供たちと、思い出話に事欠かない引退した船乗りたちだけだ。

釣りと、海水浴と、一人きりの長い散歩だけが日課となる。

間借りしているのはある船乗りの母親宅で、村で最もつましい家だ。

夕方になると、パイプを吹かし、小さな黒い羊たちの鳴き声を聞きながら、その年老いた母親が網を修理するのを手伝う。

解毒のための静養が終わると、思い残すことなくパリへ戻る。そして、喜々として冒険と危険を求めてかけずり回る——ほんの一カ月前には、それらを避けるために、同じくらい喜々として島へ向かったのに。

「ビールにサンドイッチ、レモネードはいかがですかあ」

「……枕はご入用ではありませんか？ 毛布もございます」

遠くで発車の合図がし、車輪がきしむ。

ドアが閉まる音。列車が動き出す。

アンドレ・ブリュネルは再びまどろんだ。

ドアが開き、光が射す。「失礼」というくぐもった声。

ブリュネルには鬪人者ちんぱうの姿が、一瞬だがかるうじて見えた。フェルト帽を目深に被り、黒っぽいコートの襟を立てていた。男はもう通路を遠ざかっている。

(どうも怪しいやつだ！)

急に明かりを見たせいで、ブリュネルはすっかり目が覚めてしまった。毛布を押しつけ、立ち上がる。いつもの癖で体を少し動かしてほぐし、荷物棚に手を掛けて背筋をしっかり伸ばす。

「よし、絶好調だ。煙草でも吸うか」

今度は自分でドアを横に引いたが、その瞬間、足が止まった。

数歩先で、ブリュネルの休息を邪魔した不届き者が別のコンパートメントから出てきた。

「あいつは全員を起こすつもりらしいな」探偵は苦々しくつぶやいた。

実際、男は後方をサッと見てから、新たなドアに近づいた。

男は片手を伸ばし、明かりのスイッチを入れ、何か口ごもりながらスイッチを切った。

ブリュネルは彼から目を離さない。

(捜しているのがきれいな女性なら、手助けしてやってもいいが)

だが、すぐに自分自身をたしなめる。

(馬鹿だな、忘れたのか？ ヴァカンス中だぞ)

見知らぬ男はコンパートメントをしらみつぶしに調べていく。とうとう一等車の端まで来た。慣れた手つきで最後のドアを開け、明かりを数秒間こうこうとつけてから、コンパートメントのドアを元どおりに閉めた。

ブリユネルは不安になった。

男が別の車両へ向かうなら、後を追おう。不審な挙動がどうも気にかかる。

だが、不審者は先へ進む気配がない。両手をコートのポケットに突っ込み、頭を低くし、考えているか、何かを待っているかのようだ。

ブリユネルは男の顔を確かめようとしたが、無駄だった。深く下ろした帽子のつばと高く立てた襟の間から垣間見えたのは、異様に光る眼差しだけだった。

そのまま十分ほどが過ぎ、列車が速度を緩めたのを機に、探偵は退屈な見張りを切り上げようとした。

そのとたん、男がこの減速を待っていたように見えた。何かが起こる予感がする。

背筋を伸ばした男の肩の動きからは、強い決意が見とれた。男は左手をポケットから出すと、端のコンパートメントのドアを再び引き、今度は照明を常夜灯にしたまま入っていった。

アツという間の出来事だった。アンドレ・ブリユネルは不安に胸を締めつけられ、ほかには何も感じられなくなった。

端のコンパートメントまで大股で進み、怪しい男が背後で閉めたばかりのドアを思い切り開ける。

座席の上で女性もがいていた。男は片手で彼女の喉を押さえつけ、もう片方の手で頭上に短剣を振りかざしている。細長い刃がざらりと青く光る。

ブリユネルは突進した。

二人は激しくぶつかり合う。だが、悪漢は明らかに力で劣った。一分と経たないうちに取り押さえられ、肋骨を砕けんばかりに締めつけられて息も絶え絶えとなった。

だが、不意にブリュネルが手を離した。

「あ！ 畜生」

男が短剣を彼の手に突き立てたのだ。

痛みでせいでブリュネルは一瞬、身がすくんだ。男が通路に飛び出す。

後を追ってコンパートメントの外に出ると、逃げた男はすでに車両の反対の端にいた。男がドアを開く。

補修工事中の線路で速度を落とした列車が、再び加速し始める。男はステップから飛び下りた。

ブリュネルが昇降口にたどり着いたとき、黒い人影が土手の下で起き上がり、闇に消えた。

ブリュネルは躊躇した。

やはり、もう遅かった。急行列車はすでに通常の速度に戻っている。飛び下りるのは自殺行為だ。

ブリュネルはステップを二段上がり、通路に戻る。相変わらず通路に人影はない。車両内の客はまばらで、誰も事件に気づいていない。

ドアを閉めるとき、足元に小さな四角い厚紙が落ちているのが目に留まった。

機械的にそれを拾い上げ、見もせずにとりあえず財布に入れた。そして足早に、襲撃のあったコンパートメントへ引き返した。

若い娘がコンパートメントの片隅に身を縮め、体中を震わせている。

二十歳くらいだろうか。金髪、青い目、小さな口。顔色が青白いだけに唇が二滴の血のように見え、顔はひどくゆがんでいるにもかかわらず、美しさが損なわれていない。

「怪我はありませんでしたか？」

「ええ。でも、あなたのほうが。まあ！ 手が、お気の毒に」

ブリュネルは自分の指を見た。たしかに、白い肌がまったく見えない。

「まるで肉屋の手だ」と冗談を言ってから、悔しそうにつけ加えた。

「今からでも追いかけることはできません。賊からはだいたいぶ離れましたが！」

彼は迷いながら非常ベルを見た。娘が首を振る。

「無駄ですわ。だいたいぶ離れてしまったのでしよう。それに、大事おおごとになります」

大事？

たしかに彼女の言うとおりだ。届け出をし、書類を書かなくてはいけない。ブリュネルはその煩わしさをいやというほど知っている。

ヴァカンスはどうなる？ ウエッサンは？

若い娘は旅行鞆からポーチを取り出し、命の恩人の手をハンカチで縛った。

「お嬢さん、そんなに震えていては、ちゃんと結べないんじゃないやありませんか」とブリユネルは微笑みながら言った。

「本当に、私……」

腕の中に倒れこんだ彼女を、ブリユネルは抱きとめた。今度は彼が看護する番だった。

「ランバル!……ランバルに到着……!」

「サンドイツチにビール、レモネードはいかが」

まるで何もなかったかのように、二人はすぐに打ち解け、知り合うきっかけとなった事件には触れずに努めて明るく振る舞った。

旅の道連れを元気づけるため、ブリユネルは会話を始めたときから、気がかりだったことを心の隅に追いやっていた。けれども、そのとってつけたような陽気さよりも、彼の名前と身元を知ったおかげで、若い娘は安堵した。この人が護衛をしてくれるなら、恐れる必要などないではないか。

「あなたの顔色と私の手の包帯を見なければ、さっきのささいな出来事など忘れてしまいそうですよ」

彼女は吹き出した。